2304　離島覚書（長崎県・若宮島）

勝山城跡の展望台から若宮島を望む

令和５年２月 16 日

海上自衛隊壱岐警備所

本港の前面、つまり北側に辰ノ島、若宮島、名烏島（ながらすじま）という３つの小さな島が並んでいる。冬季の季節風（北西風）をこの島々がちょうど遮ることから、勝本港は静穏度が保たれてきた。このため、勝本は江戸時代には捕鯨の基地となり、また朝鮮通信使の寄港地でもあった。そして天然の良港は勝本の漁業の発展に寄与してきたのである。

３つの島の中央に位置する若宮島には海上自衛隊壱岐警備所が置かれている。両隣の島は現在無人島であるから若宮島は唯一の有人島というわけだ。若

宮島は面積 0.56 ㎢^{2}、周囲 4.2 ㎞の南北に細長い島で、標高は 100ｍであり、眺望が効く。このため古くは島の頂上付近には狼煙台が設けられ、江戸時代には平戸藩によって異国船を監視するための遠見番所が置かれていた。そして 1963（昭和 38）年には佐世保地方総監部壱岐監視隊が新たに編成され、21 名が配置されて海峡の監視業務が始まり、1966（昭和 41）年には壱岐警備所と改称されている。1970 年に対馬防備隊が新たに組織されると壱岐警備所はこちらの傘下に入った。

島には人家はなく、自衛隊の隊員が勤務している。自衛隊員の宿舎は本土側にあるので、宿直の担当者を除く自衛隊員は毎日漁協のチャーター船で通勤している。2015 年国勢調査では 14 人、2020 年の同調査では 15 人が島にいることになっている。

島には灯台があるので、以前は「灯台守」も常駐していたようだが、その後自動化され今では基本的に自衛隊が管理しているので、自衛隊の許可なしに一般人が島に上陸するのは難しい。そのため、予め自衛隊の事務所に連絡をとり、上陸の許可を得ていた。当日の朝、宿をでてすぐに電話を入れて、上陸することを伝えておいたのだ。

自衛隊の専用桟橋は辰ノ島との間のアブラメ瀬戸の中間あたりの小さな入江につくられている。ここから上陸し、ヘアピンカーブの続く急坂を上り詰めた頂上付近に警備所がおか

れている。この基地では対馬海峡を隔てた下対馬警備所と連携して海峡を通過する艦船や潜水艦の監視を行っている。

自衛隊専用の桟橋（左）、山の上に建つ海上自衛隊壱岐警備所と中継塔（右）

ＪＦ勝本町観光案内所

定期船は通っていないので若宮島に行くためには、船をチャーターしなければならない。幸い、勝本町漁協は若宮島の西側にある辰ノ島へ渡船をだしている。また自衛隊員通勤時には通勤船を運航している。事前に漁協に連絡して、島に船を出していただくことになった。

前泊した湯本温泉の千石荘から海岸沿いの道を走り、９時に勝本町漁協に着いた。連絡を取っていた小畑さんは休暇中だった。受付の女性が辰ノ島への渡船が出る勝本町漁協観光案内所に連れて行ってくれた。冬でお客が少ないためか、案内所は閉まっていた。再び漁協の事務所に戻り、少し待機することになった。

事務所に以前勝本町漁業が出版した「勝本町漁業史」が置かれていた。ぱらぱらと閲覧し、捕鯨に関するページをコピーしてもらった。10 時少し前に、再び案内所に行くとオープンしていた。この案内所には「ヒヨリミテラス」という軽食の店が併設されていて、勝本町漁協を代表するイカを使ったイカハンバーガー、イカリンク、イカミンチボールなどが提供されている。案内所の前に観光船「エメラルド壱岐」が横付けされていた。

観光船「エメラルド壱岐」には自衛隊員２人と自衛隊に所用のある中年女性が乗り込んだ。船は最初に島の南側につくられた桟橋に着けられ、私１人が降りる。残りの３人を乗せた船は自衛隊専用の船着場に向かい、その後、私を迎えに来る算段になっていた。

ＪＦ勝本町観光案内所（左）、漁協が運航する観光船・エメラルド壱岐（右）

若宮大宮神

船は突堤の先端に着岸した。舳先から飛び降りる。念願の若宮島への上陸が叶った。突堤の長さは 50mほどだ。正面に小屋があり、その脇に山道が続いている。本土側から海底ケーブルで電力が供給されているので、若宮島側の受電施設に違いない。この位置から電柱が並び、電線が張られていたので、山の上の自衛隊警備所に供給されているのだろう。

浜は人頭大の石がゴロゴロと転がり、その間を砂が埋める。浜にはプラスチック類をはじめとするゴミ類が多く漂着していた。潮上帯上部は葉を落とした褐色のブッシュになっている。植物の種類はわからない。さらにその上は森林へと続く。船が戻ってくるまであまり時間がないので、浜に建っていた神社にお参りすることにした。

突堤の左側に「妙見蛭子」と鳥居に書かれた社があった。朱色の鳥居には海上安全大漁祈願と書かれており、勝本町漁協が奉献したものだ。社の四方は長方形の大きな石が積まれている。一人では持ち上げられそうもない石なので、漁業者が共同で作業をしたものだろう。つまり最初の社は蛭子信仰に基づくものだ。

蛭子様から 80mほど西に寄った位置にコンクリート製の鳥居が立ち、鳥居から 30mほど入ったところに若宮神社がある。鳥居から神社に至る参道の両側には高さ１ｍほどの石が積まれている。蛭子様を囲んでいた石と同じ大きなものだ。石畳の参道を進むと、１対の狛犬が置かれ、正面の扉を朱色に塗り、石州瓦の拝殿が建っている。拝殿から鳥居との線を結ぶ先には、海を隔てて、勝本町漁協の建物につながった。

この神社も漁協が管理している。両方の神社ともに船がなければ来られないから、一般人が参拝することはなく、専ら漁師の信仰対象になっている。

自衛隊の職員を降ろし、船が帰って来る時間になった。再び玉石の浜を歩き、突堤に引き返すと、船がやって来た。舳先から船に飛び乗り、続いて自衛隊の専用桟橋に向かった。

本島と若宮島の間は「大瀬戸」と呼ばれている。また、若宮島と辰ノ島の間の細い瀬戸は、「アブラメ瀬戸」と呼ばれている。船は大瀬戸を通ってアブラメ瀬戸に入り、その中間あたりの小さな入江に入った。ここの桟橋が築かれ、自衛隊員が本土と行き来している場所になる。警備所は標高 100mほどの島で一番高いところにあるから、100mの落差のある坂道を登らなければならない。歩いて登るのはそうとうしんどそうなので、恐らく船が発着するたびに車が迎えに来るに違いない。当然、警備所まで行くわけにはいかないので、周辺の様子を観察、写真に撮って、隣の辰ノ島に向かった。

若宮嶋妙見本妙見神社（左）、若宮神社（右）

辰ノ島

若宮島の西隣に位置する辰の島は面積 0.30 ㎢の小さな島で、標高は 50mである。

近世から明治にかけて鯨組の鯨解体場となったこともある。この入江はイルカの追い込み場として世界的に有名になったこともある。遠浅で広い砂浜があり、夏には海水浴場が開設される。

東隣りの名烏島は面積 0.27 ㎢で、最も小さい。北側は海蝕崖が続く。標高は 67mで辰ノ島よりも高い。戦後まもなくまでは人が住んでいたこともある。

辰ノ島は２つの島が砂洲で繋がった島で、砂洲に囲まれた湾を石波止と呼んでいる。湾に連なる広大な美しい砂浜の砂は非常に粒径が細かく、かつ均質である。

船は湾の入口付近に設けられた発着場に接岸した。波打ち際に狭い通路が整備されていて、その道を歩いて奥に進む。湾内ではワカメやコンブの養殖試験が行われているようで、恐らく藻食性魚類からの食害を防止するためであろう、網で囲われていた。風が強く、足跡はすぐに消される。動物の足跡、鹿か？

北側は冬季の北西風の影響を受けて海蝕が進み、断崖絶壁になっている。

1980 年 2 月 29 日に壱岐の無人島「辰の島」（たつのしま）において駆除のために捕獲されたイルカを、米国の動物愛護団体のメンバー、デクスター・ケイト（Dexter Cate）が網を切って逃がし、壱岐の漁民に損害を与えた事件である。これは、1986 年 9 月 16 日、オキゴンドウ 128 頭が塩津浜（しおつはま）に打ち上げられたことにより、それを哀れみ悼むためである。

1980 年 2 月 29 日に壱岐の無人島「辰の島」（たつのしま）において駆除のために捕獲されたイルカを、米国の動物愛護団体のメンバー、デクスター・ケイト（Dexter Cate）が網を切って逃がし、壱岐の漁民に損害を与えた事件である。これは、1986 年 9 月 16 日、オキゴンドウ 128 頭が塩津浜（しおつはま）に打ち上げられたことにより、それを哀れみ悼むためである。

に辰ノ島へは１時間に１本ほど運航されており、

辰ノ島・石波止湾の砂浜（左）、海豚慰霊の碑（右）